国語科

橋本　正恵
前坂　　馨
四日　綾子
助言者　　折川　　司（金沢大学）

1. はじめに

Society5.0 と呼ばれる新たな社会に対応するために，潜在的な課題を見出し，既成の考えにとらわれることなくアイデアを広げ，新たな価値を生み出すことのできる能力（創造的問題解決能力）を身につけることが求められている。創造的な問題解決を行うためには，それに適した資質・能力が必要であると考え，それを本校では，「新たな価値を創造する資質・能力」として設定し，「創造デザイン科」で育成を行ってきた。この資質・能力は「創造に関する基礎的な知識・技能」「デザイン思考」「イノベーターのマインドセット」（表 1）である。

	新たな価値を創造する資質・能力	定義
1	創造に関する基礎的な知識・技能	創造やイノベーションの定義，マインドマップ，ブレインストーミングなど，新しく価値あるものを生み出すことに関する基礎的な知識・技能。
2	デザイン思考	問題解決の思考法の一つ。対象とする問題を解決するために，認識されていない内なる課題を見出し，発散的思考と収束的思考を繰り返すことで，設定した課題を解決するための最適な手立てを考えていく思考法。
3	イノベーターのマインドセット	「既存の考えに捉われることなく，斬新な発想を歓迎し，失敗してもいいからひとまずやってみる。」,「自分には，周囲の世界を変える力がある。自分には，何かを生み出し，実行する力がある。」など，イノベーターが有している態度。

表 1　新たな価値を創造する資質・能力とその定義

これらの資質・能力のうち，令和 6 年度までの研究においては，「デザイン思考」に焦点を当て，実践を重ねてきた。「デザイン思考」は課題を見つけ繰り返し思考する中で最適な手立てをみつけていく思考である。「デザイン思考」は，国語科における「書くこと」領域における「題材の設定」「情報の収集」「内容の検討」「構成の検討」「考えの形成」「記述」「推敲」「共有」に至る学習過程[1)]と類似している。（図 1）

デザイン思考のプロセス
共感
問題提起
創造
プロトタイプ
テスト

書くことの学習過程
題材の設定
情報の収集
内容の検討
構成の検討
考えの形成
記述
推敲
共有

図 1　デザイン思考のプロセスと「書くこと」の学習過程

また，令和 7 年度より「創造デザイン科」で育成してきた「新たな価値を創造する資質・能力」の中の「イノベーターが有する態度」を各教科等でも育てることで，さらに創造的に問題解決を試みる生徒を育むことが可能になるのではないかと考え，学校全体で実践を行っている。

令和 8 年度の 7 月に「国語科」と「創造デザイン科」とのつながりを生徒がどれほど実感しているのかについてアンケートを行った。図 2 は 2 年生の結果で，図 3 は 3 年生の結果である。

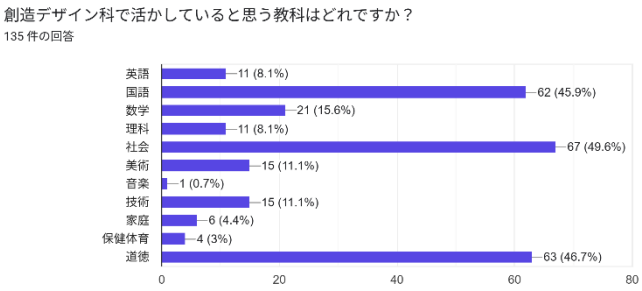


図 2　創造デザイン科と教科のつながり（2年生）

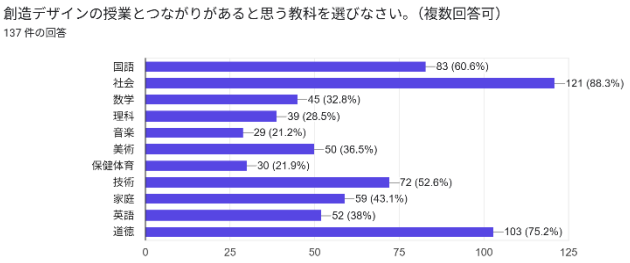


図 3　創造デザイン科と教科のつながり（3年生）

アンケートの結果からは約半数の生徒が，国語科と創造デザイン科の間につながりがあると感じていると読み取れる。しかし，社会や道徳の方がつながりを実感している生徒の割合が多いという結果になった。この結果から，「書くこと」領域の学習が生徒の中で「デザイン思考」や創造デザイン科で発揮する力にある程度寄与していると捉えることができるだろう。一定の成果は得ることができたが，今後さらに実感をもたせる工夫が必要であることが分かってきた。

2. 育成を目指す態度

A 主体的に取り組む態度
B 自ら問題を見つけようとする態度
C 新しいものを取り入れようとする態度
D 批判的に物事を見ようとする態度
E 他者と協働する態度
F 失敗を恐れない態度
G 計画を立てて実行する態度

図 4　「イノベーターのマインドセット」において本校が育成する態度

本校では，「デザイン思考」を土台としつつ，「イノベーターにとって，有しているのが好ましいと思われる態度“群”」である「イノベーターのマインドセット」を考察した。そしてこの態度群を，現在の教育が目指す「自立した学習者」が有する態度とも共通する要素を踏まえつつ，創造的な活動に特化する形で精選した。その結果，特に育成を重視すべき七つの態度に整理した（図 4）。

これら七つの態度は，いずれもデザイン思考のプロセスを粘り強く，かつ効果的に進める上で欠くことのできないものである。

令和 7 年度の国語科においては，「書くこと」領域の学習活動を軸としつつ，その過程で「イノベーターのマインドセット」の中の特に「D 批判的に物事を見ようとする態度」に重点を置くこととした。理由は以下の通りである。

①国語科において，「言葉による見方・考え方を働かせる」ことが，生徒の国語の資質・能力の育成に欠かすことのできない重要な視点となる [2)]。「D 批判的に物事を見ようとする態度」を身に付けることは，一つ一つの言葉や情報に対して立ち止まり，その妥当性，背景，意図などを注

意深く吟味する習慣を育む。これは，生徒の論理的思考力や言語能力そのものの向上に直結する。

②「D 批判的に物事を見ようとする態度」は，メディアリテラシーや情報選択など，実生活におけるあらゆる場面で必要とされる態度である。しかし，生徒は状況や文脈に依存する傾向があるため,ある教科等で学んだことは,その教科等だけで生かしたり考えたりする場合がある[3)]。そのため，この態度を国語科で意識的に取り扱うことで，生徒は創造デザイン科の活動だけでなく，日常生活においても学んだことが活きているという「つながり」を最も強く実感しやすいと考えられる。

この研究実践を通じて,「読み手」や「伝わる」といった語の出現頻度が上昇するなど，相手意識の向上や根拠を吟味しようとする姿勢の芽生えが見られた。一方で，以下の三つの課題も見つかった。

第一に，生徒にとっての「批判的」という概念が，誤字脱字や表記の誤りを確認する「校正」の域に留まっており,「論理の妥当性の検証」や「前提を疑う」といった高次の思考にまで拡張されていなかった点である。

第二に，調査・探究活動の初期段階，すなわちアンケートや資料収集の設計段階において，批判的な視点を働かせる指導が不足していた点である。多くの生徒は，情報収集の方法そのものを疑うことなく学習を進めていた。

第三に，教師の発問が「その根拠は適切か」という一つの問いかけに集中しており,「前提そのものを疑う」「反対の立場から考える」といった多様な思考の型を明示的に示せていなかった点である。

これらの課題を踏まえ，今年度も引き続き「D 批判的に物事を見ようとする態度」の育成を軸としながら，指導の焦点を以下のように改善することとした。

①「批判的に見る」対象を，形式面から内容・論理面へ拡張する

これまでの「誤字脱字がないか」「表現が不自然でないか」といった校正的な視点に加え,「主張と根拠は論理的につながっているか」「別の解釈はできないか」を意識させる指導を行う。

②探究・調査の設計段階から批判的思考を働かせる

情報収集の方法を決定する段階で,「この方法で本当に知りたいことが分かるのか」を生徒自身に問わせる場面を単元の導入に設定する。

③教師の発問レパートリーを拡充する

「根拠は適切か」に加え,「反対の立場ならどう考えるか」「この前提は本当に正しいか」など，複数の角度からの発問を計画的に用いる。

これらの改善を通じて,「批判的に物事を見ようとする態度」が,単なる文章の点検作業ではなく,主張の妥当性そのものを問い直す思考へと深化することを目指す。

3. 指導の手立てや評価方法の検討

(1) 教科として取り組む指導の手立て

令和７年度の実践では,「D 批判的に物事を見ようとする態度」が誤字脱字の確認といった形式面に留まりやすいこと，教師の発問が「根拠は適切か」という一つの視点に偏りやすいことが課題として明らかになった。この課題を踏まえ，今年度は，根拠そのものの正しさだけでなく,「根拠から結論・効果への飛躍はないか」という論理の妥当性そのものを検証する視点を，単元を通じて意識的に指導することとした。

今年度も，デザイン思考の五つのステップ（行きつ戻りつしながら進む非直線的なプロセス）[4] を踏まえたうえで「D 批判的に物事を見ようとする態度」の育成に取り組む。国語科の学習において，言葉や表現の妥当性を吟味する経験を重ねることで，生徒の思考力・想像力が養われ，それが新たな発想を生み出す原動力となる[5] と考えられる。これらの力が「創造デザイン科」にどう寄与するか，引き続き検証していく。

①2 年生　「根拠をもって反論する―AI の反論に、あなたなら何と言い返すか―」

令和８年度の７月に，文章を書く時にどのようなことを意識しているかについての調査を行い，得られた回答を KH Coder にて分析した。質問は「文章を書くときに意識していることは何ですか」というものであり，有効回答数は 128 であった。また，128 の有効回答から抽出した分析対象となる語は 2195 語である。抽出語を確定するにあたっては，表 2 に示したように置換処理を行い，表記の統一を図っている。なお，回答の性質を考え,「書く」という語についてはあえて抽出はせず，分析の対象から除外している。その上で，共起ネットワークを形成し（図6)，抽出語同士の繋がりについて確認をした。この共起ネットの集計単位は「文」である。

原文表記	置換後表記
わかる	分かる
確かめる	確認
ミス	間違い
たくさん	多く
字	文字
簡単	簡潔

原文表記	置換後表記
長々	長く
言いたい	伝えたい
相手	読み手
読者	
読み返す	読み直す
見直す	
不自然	おかしい
変	

表 2　置換後の表記

共起ネットワーク上の円は,そのサイズの大小によって言葉の出現頻度の高低を表しており，それぞれの円を結ぶ線が太いほどそれぞれの語の関係が強いことを表している。頻出度が高い語としては,「文章」が挙げられるが，これは質問の内容に対し，どのような回答をするにも使

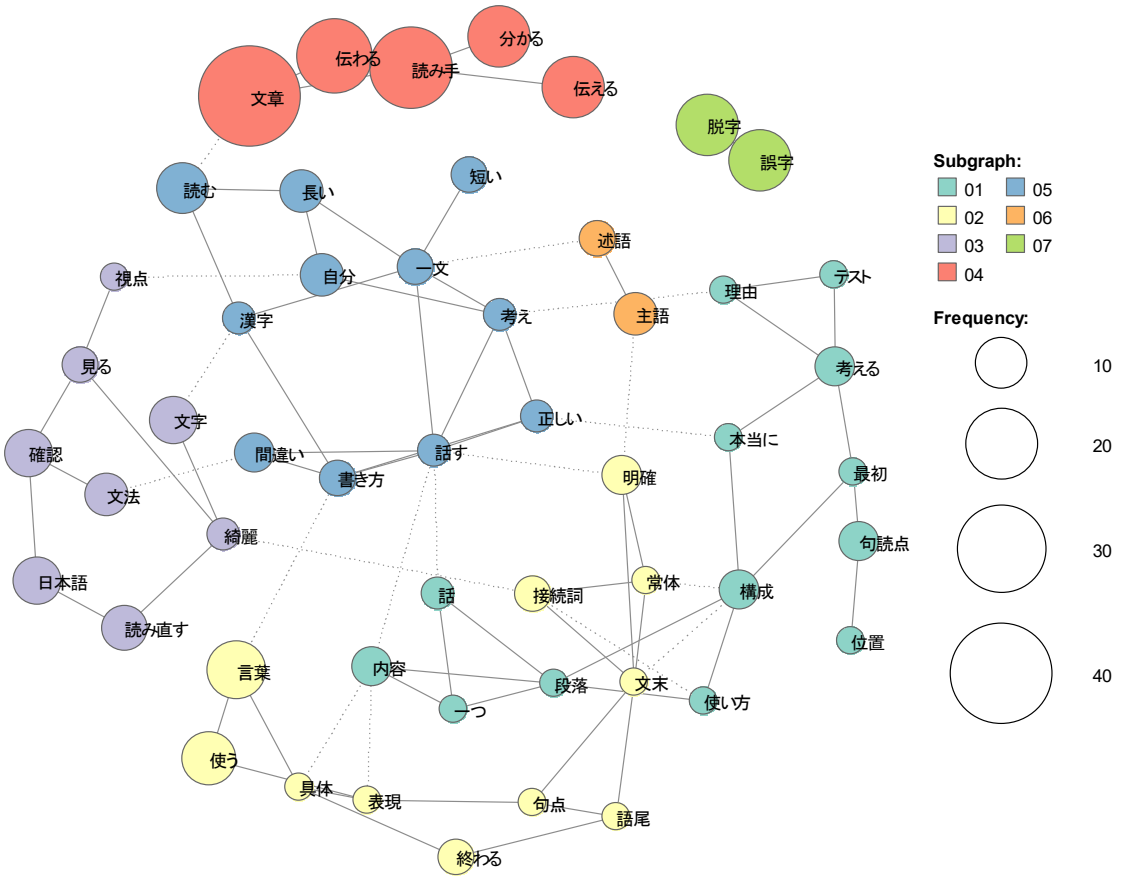


図 5　抽出語の共起ネットワーク

1	文章	名詞	40
2	読み手	名詞	26
3	伝わる	動詞	22
4	文	名詞C	22
5	誤字	名詞	15
6	脱字	名詞	15
7	伝える	動詞	15
8	分かる	動詞	15
9	言葉	名詞	13
10	使う	動詞	11
11	意味	サ変名詞	10
12	読む	動詞	10
13	確認	サ変名詞	9
14	日本語	名詞	9
15	文字	名詞	9
16	読み直す	動詞	8
17	自分	名詞	7
18	主語	名詞	7
19	長い	形容詞	7
20	文法	名詞	7

図 6　抽出語リスト（上位 20 語まで）

われる語であることが推測される。次に多い語群に関しては，図 6 の抽出語リストにて確認を行った。本年度 2 年生となった生徒（昨年度 1 年生時から継続して調査している同一集団）の，昨年度 1 月時点のアンケート結果（図 7）と比べると，「読み手」という語が増え，2 位にまで上がってきている。また，共起ネットワークから，1 位の「文章」という語と共に使われていることも分かる。「伝わる」や「伝える」という語も増えており，「デザイン思考」のプロセスにおける「共感」の部分について，昨年度 1 年間を通して実践してきたことが一つの成果となっている。

一方で，「誤字」や「脱字」といった文章の形式的な事象に関する語も多く，「D 批判的に物事を見よ

1	文章	名詞	53
2	文	名詞C	21
3	読み手	名詞	19
4	読む	動詞	19
5	伝わる	動詞	16
6	分かる	動詞	15
7	確認	サ変名詞	14
8	誤字	名詞	13
9	自分	名詞	13
10	言葉	名詞	12
11	構成	サ変名詞	12
12	脱字	名詞	12
13	意味	サ変名詞	11
14	人	名詞C	11
15	見る	動詞	10

図 7　令和 7 年度 1 月アンケートによる抽出語リスト
（上位 15 語まで）

うとする態度」が生徒には形式的な部分を見るという形で考えられている点には引き続き課題が残る結果となった。

そこで，今年度は教材「君は最後の晩餐を知っているか」を基に，「批判的に物事を見ようとする態度」の育成を目指す。

本単元では，この本文に対して AI が生成した反論文を提示し，生徒がその反論の妥当性を検討したうえで，自分の言葉で再反論する文章を書くという言語活動を設定する。

今までの実践以上に文章の内容や構成について考察させ，「D 批判的に物事を見ようとする態度」が形式的な事象に留まることのないような実践に取り組んでいく。

②3 年生「多角的に分析して批評文を書こう」

3 年生では，広告という生徒にとって身近で親しみやすい題材を選び，多角的に分析して批評文を書くことを言語活動とし，活動のゴールに据えた。客観的に対象を捉えるために，観点を決めて多角的に分析を行う。そして，分析したことを根拠として批評文を書く。書いた批評文をお互いに読み合い，広告の意図が伝わっているか，より伝わる表現について考え，広告の一部をアレンジする。そして，再度批評文を書くという流れである。相手意識と目的意識をもたせて，批判的に物事を見ようとする態度を育てていきたい。

６．参考文献

1）文部科学省:中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　国語編，pp. 32（2018）
2）三藤敏樹・山内裕介・髙木展郎:資質・能力を育成する授業づくりと学習評価　中学校国語―カリキュラムマネジメントを通して―，pp. 25 東洋館出版社（2021）
3）田中保樹・三藤敏樹・髙木展郎:主体的に学習に取り組む態度　その育成と学習評価，pp. 76 東洋館出版社（2023）
4）ジャスパー・ウ:実践スタンフォード式デザイン思考　世界一クリエイティブな問題解決，pp26 株式会社インプレス（2019）
5）文部科学省:中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　国語編，pp. 12（2018）

国語科　学習指導案

日　時：令和８年１１月２１日（土）
指導者：前坂　馨
場　所：２年４組教室

１　単元名

根拠をもって反論する ―AI との討論―

２　単元の目標

・意見と根拠，具体と抽象など情報と情報との関係について理解することができる。
〔知識及び技能〕(2)ア

・根拠の適切さを考えて説明や具体例を加えたり，表現の効果を考えて描写したりするなど，自分の考えが伝わる文章になるように工夫することができる。
〔思考力，判断力，表現力等〕B(1)ウ

・目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得たり，登場人物の言動の意味などについて考えたりして，内容を解釈することができる。
〔思考力，判断力，表現力等〕C(1)イ

・言葉が持つ価値を認識するとともに，読書を生活に役立て，我が国の言語文化を大切にして，思いや考えを伝え合おうとする。　「学びに向かう力，人間性等」

３　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①意見と根拠，具体と抽象など情報と情報との関係について理解を深めている。 ((2)ア)	①「読むこと」において，目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得たり，登場人物の言動の意味などについて考えたりして，内容を解釈している。　(C(1)イ) ②「書くこと」において，根拠の適切さを考えて説明や具体例を加えたり，表現の効果を考えて描写したりするなど，自分の考えが伝わる文章になるように工夫している。 (B(1)ウ)	①積極的に根拠の適切さや明確さについて考え，学習課題に沿って考えたことを伝え合おうとしている。

4　指導に当たって

（1）教材観

本教材『君は「最後の晩餐」を知っているか』は，レオナルド・ダ・ヴィンチの壁画「最後の晩餐」を「かっこいい」と評価する筆者の論証を追いながら，手のポーズ・遠近法・光の明暗という三つの根拠から結論に至る過程を読み取ることができる文章である。三つの根拠は，実際に絵の中の線を延長すれば自分の目で確かめられるもの，専門家の見解を信頼するしかないもの，感じ方が人によって異なるものというように，検証可能性の性質が異なっている。この違いに気づかせることは，根拠の質を見分けるという，批判的思考の中でも高度な力の育成につながる。

（2）生徒観

生徒はこれまでの学習において，書かれている内容を事実として受け止める傾向があり，根拠の妥当性や，根拠と結論のつながりの強さについて吟味する経験は十分とはいえない。特に，もっともらしく書かれた文章に対しては，その根拠の質を疑わずに受け入れやすい実態がある。一方で，興味を引く題材や，実際に手を動かして確かめられる活動には主体的に取り組む姿も見られる。

（3）指導観

批判的に物事を見ようとする態度を育成するために，本教材を用いて「根拠の明確さ・検証可能性」について指導していく。特に，根拠には検証できるもの・専門家に依存するものや主観的なものという性質の違いがあることに気づかせ，単元を通して「この根拠はどこまで信頼できるのか」という視点を持たせ続けたい。また，AI との往復討論を通して，自分の主張を一方的に述べるのではなく，相手の主張の一部を認めた上でなお反論できる点を探る，という多角的な思考を経験させたい。さらに，AI との討論を３回に限定することで，必要な情報や主張の根拠を的確に探し，表現する力の育成を狙う。最終的には，これらの過程で得た材料を根拠として明確に用いながら，読み手を意識した再反論文を書く力を育てる。書き手が人間か AI かにかかわらず，根拠と結論のつながりを吟味する態度を育てたい。

5　指導と評価の計画

〈読むこと：第 1〜4 時〉

小単元１（読むこと）

時	主たる学習活動	評価する内容	評価方法
1 ・ 2	○ 単元の目標と今後の授業の流れを知り，本文を読む。 ○ 本文の三つの根拠（手のポーズ・遠近法・光と影）を整理する。	［知識・技能］①	ノート
3	○ 使徒の手のポーズを実際にまねし，美術史的な解釈と照らし合わせる（使徒当てゲーム）。		
4	○ 根拠③（光と影）の検証可能性の限界を考え，根拠の三つの種類について整理する。	［思考・判断・表現］①	ノート

〈書くこと：第5〜9時〉

小単元2（書くこと）

時	主たる学習活動	評価する内容	評価方法
5・6	○ クラス全体でAI役との往復討論を行い（3往復），根拠に基づいた反論を検討する。 ○ 討論記録を振り返り，再反論文に使える材料を整理する。		
7	○ 材料を整理し，再反論文の構成メモを作る。	［思考・判断・表現］②	ノート
8・9	○ 構成メモを基に，再反論文の下書きを書く。 ○ ピア評価を行い，指摘を踏まえて推敲し，清書する。単元の振り返りを行う。	［思考・判断・表現］② ［主体的に学習に取り組む態度］①	ワークシート 行動観察，清書原稿

6　単元の流れ

〈読むこと：第1〜4時〉

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法等
1・2	○ 単元の目標と今後の授業の流れを知る。 ○ 本文を読み，三つの根拠を整理する。 ○ 筆者自身の記述にある断定の踏み込みを探す（ウォームアップ）。	・最終的にAIの反論に再反論する文章を書く単元であることを伝える。 ・根拠と，そこから導かれる効果（結論）を分けて整理させる。 ・答えを教えず，まず自力で本文から探させる。	知識［知識・技能］① ノート ・ここでは，本文の根拠を正確に整理できているか確認する。
3	○ 使徒の手のポーズを実際にまねし，感情や発言内容を予想する（使徒当てゲーム）。 ○ 美術史的な解釈と照らし合わせる。	・名前を伏せた画像を配布し，直感的な予想を大事にする。 ・専門家でも意見が分かれる例（ペトロの手の謎）を紹介し，根拠の確からしさに濃淡があることに気づかせる。	
4	○ 根拠③（光と影）の検証可能性の限界を考える。 ○ 根拠の三つの種類（検証できる／専門家依存／主観的）を整理し，本文の構成や論理の展開について自分の考えをまとめる。	・教室からは確認できないことに気づかせ，専門的な情報を信頼するという行為自体も批判的思考の一部であることを伝える。 ・ここまでの読解のまとめとして，本文の論の運び方について自分の考えを記述させる。	［思考・判断・表現］① ノート ・ここでは，本文の構成や論理の展開について，根拠の性質を踏まえて自分の考えをまとめているかを確認する。

〈書くこと：第5〜9時〉

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法等
5 ・ 6	○ Geminiに指示文を貼り，三つの根拠のうち一つと，自分の立場を選ぶ。 ○ Geminiと３往復の討論をする。 ○ やり取りをドキュメントに貼り，提出する。 ○ 討論記録を見返し，使えそうな材料を整理する。	・AIは，教員が用意した指示文の範囲で相手役をすることを伝える。 ・立場に正解はなく，AIの主張に従う必要はないことを伝える。 ・生徒同士の話し合いの場面も取り入れ，様々な角度から論を考え，組み立てさせる。 ・結論や，AIの論に反対すること自体ではなく，自分やAIの根拠を吟味することを目的とさせる。 ・本時は指導に生かす評価とし，記録には残さない。 ・AI役が認めた点・押し切られた点の両方を自覚させ，次時の「一部容認」の書き方につなげる。 ・本時も材料整理の過程であり，正式な評価規準としては数えない。	［指導に生かす評価］ 〈書くこと〉 討論記録，ワークシート ・ここでは，本文の記述を根拠として示しながら，AIの主張に対する自分の反論を書いているかを確認する。
7	○ 再反論文の構成メモ（①相手の主張の要約→②一部容認→③反論→④結論）を作る。	・③の反論には，必ず本文の記述を根拠として明記させる。	［思考・判断・表現］② ノート ・ここでは，集めた材料を整理し，構成を工夫しているかを確認する。
8 ・ 9	○ 構成メモを基に，下書きを書く。 ○ ピア評価を行い，指摘を踏まえて推敲し，清書する。 ○ 単元の振り返りを行う。	・机間指導で，根拠が本文の記述に基づいているかを確認する。 ・よい点も必ず１つ書かせ，指摘だけで終わらせない。 ・推敲前後の変化が分かるようにする。	［思考・判断・表現］② ワークシート ・ここでは，根拠を明確にして再反論を書いているかを確認する。 ［主体的に学習に取り組む態度］① 行動観察，清書原稿 ・ここでは，相互評価の指摘を推敲に生かそうとしているかを確認する。

7　本時の学習（第一次中１時）

（１）目標

筆者の根拠の強弱を，AI との討論を通して見つけ，本文の記述を根拠にして，自分の考えを書くことができる。〔思考力，判断力，表現力等〕Ｂ(1)ウ

（２）準備・資料等

教科書，iPad，ワークシート

（３）展開

学習活動	・指導上の留意点など　【評価規準】（評価方法）	時間
○前時の確認と，本時の内容を確認する。	・本時は，AI が生徒の立場の反対に立って討論することを伝える。 ・立場に正解はないこと，AI の主張に従う必要はないことを伝える。 ・あくまでも「根拠」について吟味するよう伝える。 ・Gemini への指示文の貼り付けは，前時の最後に済ませておく。	5 分
課題：筆者の根拠の「強いところ」と「弱いところ」は、どこだろう？		
○討論する根拠と，自分の立場を選び，理由をワークシートに書く。	・自分が一番語れる根拠を選ばせる。 ・立場が書かれていないときは，AI が聞き返すことを伝えておく。	8 分
○隣の人と，選んだ根拠・立場やその理由を見せ合う。	・原則，隣同士のペアで行う。 ・違う根拠を選んでいてもよいことを伝える。 ・討論の要点はワークシートに記入させる。	3 分
○AI と，１～２回目の討論をする。	・本文の言葉や出来事を示して，根拠を示すことができているか確認する。	15 分
○ペアを作り，AI の返答の中に，本文にない言い方，決めつけすぎている言い方がないか，一緒に探す。	・見つけた言い方を，ワークシートに書かせる。 ・「その言い方は，本文のどこから言えるか」と，本文に戻って確かめさせる。	5 分
○AI と，第３回の討論をする。	・交流②で見つけたことを，第３回の答えに生かしてよいことを伝える。	5 分
○最初の課題にもう一度答える。	・ペアを作り，強いところ・弱いところを言い合い，参考になったことを書く。 ・振り返りも記入させる。 ・ワークシートは提出させる。	5 分 4 分
まとめ：筆者の根拠の強いところは～であり，弱いところは～である。		
	・【思考・判断・表現】（討論記録，ワークシート） ※指導に生かす評価。記録には残さない。	

国語科　学習指導案

日　時：令和８年 11 月 21 日（土）
指導者：四日　綾子
場　所：３年２組教室

１　単元名
多角的に分析して批評文を書こう

２　単元の目標
・具体と抽象など情報と情報との関係について理解を深めることができる。〔知識及び技能〕(2)ア
・表現の仕方を考えたり資料を適切に引用したりするなど，自分の考えが分かりやすく伝わる文章になるように工夫することができる。　〔思考力，判断力，表現力等〕B(1)ウ
・言葉がもつ価値を認識するとともに，読書を通して自己を向上させ，我が国の言語文化に関わり，思いや考えを伝え合おうとする。　「学びに向かう力，人間性等」

３　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①具体と抽象など情報と情報との関係について理解を深めている。　((2)ア)	①「書くこと」において，表現の仕方を考えたり資料を適切に引用したりするなど，自分の考えが分かりやすく伝わる文章になるように工夫している。　B(1)ウ	①自分の考えがわかりやすく伝わる文章になるように，粘り強く工夫し，学習の見通しをもって批評文を書こうとしている。

４　指導に当たって
（１）教材観
批評文とは，対象とする事柄の特性や価値などについて，根拠をもって論じたり，評価したりした文章である。本教材では，広告を多角的に分析し，論理の展開や表現を工夫して批評文を書くという言語活動を行う。広告という生徒にとって身近で親しみやすいメディアを選ぶことで，学習意欲を喚起し，多角的な視点からその妥当性を吟味する力を育むことができる教材である。

（２）生徒観
生徒は日常的に学習用端末を使用しており，さまざまな視覚的・言語的情報に触れている。それらの情報を鵜呑みにせず，立ち止まって吟味するという批判的な見方は不足しているように感じる。これまでの学習において，事実と意見を区別して読むことは理解しているが，自分の意見を述べる際には多角的な根拠を挙げて論理的に分析することには苦手意識が見られる。

（３）指導観
昨年度に引き続き国語科では「批判的に物事を見ようとする態度」の育成に取り組んでいる。この単元を通して，表面的な内容の理解に止まるのではなく，広告の作り手の意図や表現の工夫を多角的に分析していく。分析したことを単なる批判で終わらせるのではなく，情報の信頼性や妥当性を多角的に吟味する力を育てたい。そして、身につけた力を批評文という形で表現させ，交流することでさらに理解を深めさせていきたい。

5　指導と評価の計画（7時間）

時	主たる学習活動	評価する内容	評価方法
1 ・ 2 ・ 3	○単元の目標と今後の授業の流れについて知る。 ○批評文の書き方を知る。 ○題材を選ぶ。 ○観点を決めて分析する。 ○構成を考える。 ○批評文を書く。	［知識・技能］①	ワークシート
4 5 ・ 6	○批評文を読み合い，より伝わる広告について考える。 ○考えたことをもとに広告を作り直す。 ○作った広告の批評文を書く。	［思考・判断・表現］① ［主体的に学習に取り組む態度］①	ワークシート ワークシート，観察
7	○書いた批評文を読み合い，交流する。 ○単元の振り返りをする。		

6　単元の流れ

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法等
1 ・ 2 ・ 3	○ 単元の目標と今後の授業の流れについて知る。 ○批評文の書き方を知る。 ○題材を選ぶ。 ○観点を決めて分析する。 ○構成を考える。 ○批評文を書く。	・広告を多角的に分析して説得力のある批評文を書くという学習の見通しをもたせる。 ・自分の考えを補強するための根拠になる資料を挙げさせる。	〔知識・技能〕① ワークシート ・多角的に広告を分析している。
4 ・ 5 ・ 6	○批評文を読み合い，より伝わる広告について考える。 ○広告の文章を書き直す。 ○作った広告の批評文を書く。	・相手意識・目的意識をもたせる。 ・作り手の意図が正しく伝わるか，表現の工夫が効果的かどうか考えさせる。 ・初めに書いた批評文との違いを意識させる。	［思考・判断・表現］①　批評文 ・表現のしかたを考えたり，資料を適切に印象したりして，わかりやすく伝わる批評文を書いているか確認する。
7	○書いた批評文を読み合い，交流する。 ○単元の振り返りをする。	・各自の批評文が目的や意図に合った文章になっているのか，多角的に分析できているか評価しながら読ませる。 ・単元の振り返りを行い，学習したことをまとめさせる。	［主体的に学習に取り組む態度］① 観察，ワークシート ・自分の考えがわかりやすく伝わる文章になるように，粘り強く工夫し，学習の見通しをもって批評文を書こうとしている。

7　本時の学習（第二次中１時）

（１）目標

より効果的に伝わる表現について考えることができる。〔思考力，判断力，表現力等〕　B(1)ウ

（２）準備・資料等

教科書，iPad，ワークシート

（３）展開

学習活動	・指導上の留意点など　【評価規準】(評価方法)	時間
○前時までの学習を振り返り，本時の課題を知る。	・本時の学習課題を確認する。 ・前時に書いた批評文を完成させておく。	5 分
学習課題：より効果的に伝わる広告にするには？		
○班に分かれて，批評文を読み合う。	・批評文に書かれていることが，広告のどこから読み取れるのか確認しながら読む。 ・お互いの批評文のよさや改善点について話し合い，助言し合うように促す。	15 分
○広告の伝えたい相手を変更するとしたら，どのようなアレンジが必要か話し合う。	・広告の伝えたいメッセージを確認する。 ・伝えたい相手を変更することで，元の広告でメッセージが伝わるのかどうか検討させる。 ・何をどのように変えたらよいかを考えさせる。	15 分
○アレンジするポイントとその理由を全体に共有する。	・アレンジするポイントとその理由をホワイトボードに記入させる。 ・具体的にどう変えるのかは，次回考える。	10 分
○本時の振り返りと，次時の確認をする。	・次時は，今回共有したポイントの中から自分が良いと思うものを選んで，広告をアレンジすることを伝える。	5 分
まとめ：広告のキャッチコピーを変更したらよい。なぜなら，便利な AI をどんどん使っていきたい若者には響かない表現だからだ。		
	より効果的に伝わる表現について考えている。 【思考力，判断力，表現力等】B(1)ウ （ワークシート，観察）	